

E-1 青年の生活空間としての個室について(第1報)-所有と使用の実態-  
山梨大学教育 浅見雅子

目的 児童と成人との間の時期で、独特の生活空間の構造を持つ、心身共の発達過程にある青年の住居の中に占めるプライベートな空間に、何時頃与えられ、どのように構成し、生活しているのか、その実態を確かめ、個室に対する意識(感覚、感情)を把握することとを目的としたものである。

方法 山梨県甲府市のほぼ社会階層を同じくする家庭より通学する率の多い、中学、高校、大学の男女学生516人を対象として、質問紙調査法によって調査を行った。調査時期は、昭和48年11月～12月で、授業時間の一部として解答させたものである。

結果 個室の所有状況は、大学男子の64%が最高で、中学女子の43%が最低で、中、高、大を通し、平均して男子の方が女子より個室を多く持っている。また、中学は、高校、大学に比べ所有率は低い。個室の広さは、中、高、大ともに6帖が一番多く、次いで4帖、5帖の順となっている。個室の与えられた年令は、中、高、大を通し、ほぼ10才～13才(大学男子は14才～18才)で、小学4年から中学1年の時期となっている。個室の状態として、ポスター等を貼っているのは、平均80%で、その内容は、中学では人物、高校、大学になると人物と風景が半々となっている。また、家族から秘密が保たれる割合は低い。家族が入りこんでくる状態は、中学が多く、高校、大学になると減少する。個室は、中、高、大を通し、男子は休養、女子は勉強に最も多く使われ、趣味、対話に使う割合は少ない。個室に居る割合は平均35%で、家族と茶の間、居間に居ることが多く、家族から離れ、一人になりたい要求が少ない。